

宮崎県市町村・地域づくり団体等協働モデル事業

まちづくりオモシロ大実験！
五本松ダンボール団地

Social Good Fellows

三股町

事業名：まちづくりオモシロ大実験！五本松ダンボール団地 事業

1. 【団体の概要】

「町民とともに考え、町民とともに進めるまちづくり」の方針に基づき三股町が進めている「交流拠点施設整備事業」に関わる中で、三股町を盛り上げる活動に対する意欲が芽生え、同じ志を持つ仲間たちと令和4年12月に「Social Good Fellows」という団体を立ち上げた。

2. 【事業の目的、ねらい】

三股町交流拠点整備予定地（現：五本松団地跡地）を活用し、産学官民（町内外の企業・事業者や中学校、役場、地域団体・個人）の協働による活動をとおして、整備事業に対する町民の機運醸成を図ること。また、「楽しい」を大事にした企画を通じて、様々な人たちの関わりの輪を広げ、個性が発揮される取り組みを行いながら、まちの活性化に寄与するというねらい。

3. 【活動内容】

企画、制作、実施において、産学官民の協働による事業を実践した。

企画：三股町、宮崎県にゆかりのあるアーティスト

制作：三股中学校美術部、企業・団体

実施：地域事業者（出店者）・個人、商工会、役場

イベント内容としては、五本松団地跡地のシンボルとなっている“赤いゾウのすべり台”をモチーフに「ゾウの背中にダンボール王国をつくる」ワークショップをメインに、以下の4コンテンツを実施。

参加料金はすべて無料とし、参加者は合計181名であった。



[コンテンツ別紹介]

①ゾウの背中にダンボール王国を作ろう！

ダンボールをつかった作品でゾウの背中に楽しい街をつくる

対象：小学生以上

日時：令和5年11月11日(土) 10時～16時

※10月21日に土台となるゾウのオブジェの公開制作を実施

※11月12日(日)は一般公開

協力：桑畑泰三氏（三股在住の画家・陶芸家）

松下太紀氏（宮崎県で活動する造形作家）





②お菓子のパッケージでオーナメントを作ろう！

お菓子の箱や袋を切り取り、自由に組み合わせて作るオリジナルのクリスマスオーナメント

対象：小学生以上

日時：令和5年11月11日(土) 10時～16時

協力：寺原優子氏（都城圏域で絵画ワークショップ等を展開）



③避難所で活躍する災害時家具づくり

スクエアパネル(木製パレット)を磨いて組み合わせて簡易的なテーブルとベンチを製作

対象：小学生以上

日時：令和5年11月11日(土) 10時～12時

協力：海野建設株式会社 ほか



④丸善雄松堂のブックセッション「旬会」

互いの「旬」について本を通じて交換しあい連想を楽しむ読書体験
対象：主に中学生以上

日時：令和5年11月11日(土) 13時～16時

協力：MARUZEN-YUSHODO（丸善雄松堂）



4. 【事業の成果、効果】

- 地域にいるクリエイターの方々の独創的な発想をもらい、モノづくりをとおして多種多様な人と関わることができた。
- 三股中学校にボランティアを募集したところ、美術部員約15名が参加。共に考え、共に創る機会ができたことで、中学生にとって、まちの中で自身もプレイヤーとしてまちに貢献できると可能性を感じた。
- クリエイターにとっては、モノづくりをする人間としての存在意義、アート楽しさや可能性、魅力を知ってもらう機会となった。アーティストにとっても、ものを伝える、発信することに対する自己研鑽の機会ともなった。

●行政との協働にあたっては、三股町を代表する催事「ふるさとまつり」と同日開催とし、Social Good Fellows も実行委員会に参画した。まつりとの連携を深めたことで、五本松エリアの回遊性を高め、賑わいを創出した。

●年代をこえるつながり、交流によって、モノづくりにとどまらない発見や気づきにつながった（協働者、参加者の中には障がい者もいた）。

●イベントをとおして、まちに関わることに對する主体性を育むことができた。

5. 【まとめ】

今回の協働モデル事業をとおして、さまざまな団体・個人と連携したことで、自身が住むまち、活動するまちに對する相互理解が深まった。

Social Good Fellows が活動主体を束ねるコーディネーターであるとするならば、まずは、活動できる場や機会を仕掛ける（設定することから行っていきたい。

活動主体が主役となれる場所、町民が暮らしの中の楽しみを発見できる機会があることで、地域（地元）の人が、我がまちの人や資源の素晴らしさを知ることができる。

最初は参加者であった町民も、「私の特技も知ってもらいたい」と、活動主体になっていくことも期待できる。

今後もこのような活動を継続・発展していきながら、まちの関係人口や活動人口を増やし、組織の枠を越えたつながりで実践し、障がいの有無や性別・人種の隔てのない関係を築き、ゆくゆくは、まちのファンや、町民のシビックプライドを醸成していきたいと考えている。

町民一人ひとりの存在を承認し合えるまちはきっと「暮らしがいのある、ずっと住みたい地域」になる。

このように、今回の協働モデル事業をとおして、この先の地域を明るく見られる機会となった。今回このような成果や展望を得られる機会をいただき、誠にありがとうございました。